



TITLE:

[書評] アンドレ・レヴィ著「中國
古典文學」

AUTHOR(S):

興膳, 宏

CITATION:

興膳, 宏. [書評] アンドレ・レヴィ著「中國古典文學」. 中國文學報
1992, 45: 115-122

ISSUE DATE:

1992-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177527>

RIGHT:

この中からどのような糸のつながりを見出すか、結局は読み手の資質を問われることになりそうだ。

最後に「餘録」であるが、これは、詩話の類に見える事跡・作品にかかわる記事や、関連事項のうち、箋證の部分にとりあげることのできなかつたものをまとめて記したものである。全部で二六條に分かれ、それぞれに按語が加えられている。記事の配列には、とくに基準があるようには見うけられない。詩話の類を一括して巻末に附すのも、いわば傳統的な手法だが、これはたんに羅列したものではなく、資料として吟味し、みずからの見解をも加えている點で評價できる。

以上、本書を構成の順にひととおり眺めたが、全體を通じて感じられることは、史學者でもあった著者瞿硯園氏の、劉禹錫とその時代に對して注がれる目であり、一見識を備えた考證の態度である。一面では、それがやや強引な推斷をもたらしたり、事實關係に偏った注釋を書かせることになつてはいるのだが、しかし同時に、本書の大きな魅力で

あることも疑いない。原稿完成後、二〇年以上を経て刊行された本書だが、内容はその年月を越えてなお新しい。補正すべき點を含めて、今後の劉禹錫研究の一つの出發點を提供する著作であり、基礎研究として持つ意義は、まことに大きいと言えよう。

(大阪市立大學 齋藤 茂)

アンドレ・レヴィ著『中國古典文學』(文庫クセジュ二九六) 一九九一年六月、一二五ページ

André Lévy: *La littérature chinoise, ancienne et classique*. Que sais-je? 296, juin 1991, 125 p.

文庫クセジュの一冊として、オディル・カルタンマルク女史の『中國文學史』(*La littérature chinoise*)が出たのは、第二次大戰の餘燼もまださめやらぬ一九四八年のことだった。(なお、この書は、魚返善雄・高田淳兩氏による邦譯が一九五七年に出ており、島田久美子氏の書評が『中國文學報』第七冊に見える)。この度のレヴィ氏の新著は、文

庫クセジュのナンバー二九六をそのまま引き繼いでおり、その意味でも、カルタンマルク女史の舊版を直接繼承する新版といつてよい。實に四十三年ぶりにフランスの一般讀者向けに書きおろされた中國文學史ということになる。

但し、舊版・新版といつても、それは便宜上の區分であつて、實は兩書は全く對照的な構成原理によつて組み立てられている。カルタンマルク女史の書は、文學史の常法ともいふべき斷代的記述で、第一章文學の起源から周末まで、第二章兩漢、第三章漢末から南北朝末まで、第四章隋唐、第五章宋、第六章元、第七章明、第八章清、第九章文學革命という章立てに見られるように、ほとんどの章が主要な王朝ごとに設けられる。いわば時間による縦割りの區分で、邦譯が書名を『中國文學史』とするのもっともである。それに對してレヴィ氏の書は、文學ジャンルに力點を置く區分で、いわば横割りの區分法を用いている。以下、各章及び節の構成を掲げておく（但し必ずしも嚴密な譯ではない）。

第一章 古代 (L'Antiquité)

I 起源

II 百家争鳴・百花齊放

1 墨子と名家

2 法家

3 道家の祖（評者注、老子と莊子）

III 儒家の古典（評者注、五經と論語・孟子）

第二章 古典散文 (La prose classique)

I 敘述の技法と史書

II 「古文」への回歸

III 「小品文」の黄金期

IV 文學評論

第三章 詩 (La poésie)

I 古代詩の二つの源流（評者注、『詩經』と『楚辭』を指すが、『詩經』はI—IIIで論じられる）。

1 『楚辭』

2 宮廷詩

3 豔詩

Ⅱ 中國の詩の黃金期

1 美的感動から觀念の飛翔へ（評者注、魏晉南北朝の詩）

2 成熟期（評者注、盛中唐詩）

3 晚唐詩

Ⅲ 歌われる詩の成功（評者注、主として詞を扱い、曲にも觸れる）。

第四章 娛樂のための文學、小説と演劇（La littérature de divertissement : roman et théâtre）

Ⅰ 古代中國における語りものの文學

Ⅱ 演劇

1 「北曲」

2 「南曲」

Ⅲ 小説

1 「口誦」の文學

2 中短篇小説

3 長篇小説

對象とする時代の下限は清末であり、記述の最後は林紓

書 評

の翻譯小説で結ばれていて、五四以後の文學の展開については、短い暗示的な説明にとどめられている。書名の副題に、“*ancienne et classique*”と記される所以であり、カルタンマルク女史の舊版が「文學革命」の一章を設けているのと、やはりいささかの違いを見せる。本書を著わした意圖は、著者によれば、既存の文學史に新たな一書をつけ加えたり、カルタンマルク女史の書に取って代わろうとするようなつもりではなく、次のようなことにあるという。

「熱心な讀者に對して、從來とはことなつた、より具體的な、王朝別の年代記にならないようなアプローチのかたを委ねて、既存の文學史のリストを補完することが、むしろ私の願ひである。小著が提供しようとするのは、文學史というより、穴だらけは當然ながら、過去の中國文學の見取圖タブローなのである」（序）

ここに示唆されるようなアプローチの方法を具體化するために、ジャンル中心の構成ははむしろ必然だったとさえいえるかもしれない。そうした全書にわたる構成の中で、著者がさらに一貫して採用した方針は、記述を限られた少

數の著名な作家・作品に絞って、その内容を想起させるに足る短い引用を頻繁に敘述の間に挟むことである。わずか百二十ページ餘りの紙幅に、三千年にわたる中國文學の概容を手際よく盛りこむことがいかに困難か、かつて私も同趣の中國文學史を執筆した經驗を思い返して、身にしみてよく理解できる。しかも、一般的にいって中國文學に對して日本人よりはずっと馴染みの薄いフランス人を對象とする書なのだから、いっそう著者の苦勞が偲ばれようというものだ。その著者の狙いは、概して成功していると私は思う。そしてその背景には、舊版から新版に至る四十餘年にわたるフランス・シノロジーの進展を見るべきであらう。

第一章古代は、先秦の時代を對象としており、この章だけが例外的に時間による區分法を用いるが、それは文學の基礎がこの時期に形成されたという判斷からである。舊版ではこの時期が全書のほとんど三分の一を占めるのに對して、レヴィ氏の新版ではその比重がずっと小さくなっている。文學の基礎がこの時期にあるのは認めながらも、より以上にその後の二千年間の展開を重視する考えの反映とい

えようか。この章の冒頭では、まず「古代」をはじめとする中國史の時代區分にさまざまな異説の存することを、内藤湖南の三區分説、アヘン戦争以前をすべて古代とするマルクス主義の説（現代の中國文學史で一般に行なわれている區分法）、そして中國語の時代區分説を引きながら簡略に説明したあと、レヴィ氏は、「文學の全體圖でいえば、古代が終わりかけるのは紀元二世紀としてよい」と、文學史に關する自らの時代區分を提示している。時代區分の問題點が要領よく説明されているのだが、それならば「古代」以後の文學史の時代區分についても、著者の考えを示しておいてほしかった。しっかりした根據のある時代區分は、中國文學史に關していまだ確立するに至っていないからである。

第二章古典散文でも、「文」の原義が裝飾 (orné) あるいは洗練 (raffiné) であつて、「質」 (substance) ないしは substantiel) と對應する一方では、裝飾性を必然とする「詩」と對應する「散文」を意味することの指摘など、キイワードのきちんとした定義づけは、全書を通じて一貫している。

因みにいえば、フランス語では saint と譯される「聖人」の語に、中國では宗教的な含意がないという注意など（第一章）、いわれてみればその通りだが、背後にカトリック國の異文化が感じられておもしろい。

第二章では、司馬遷から韓愈・柳宗元・歐陽修・蘇軾を経て、袁宏道・李漁・袁枚へとつながる古文の流れを、豊富な引用をまじえながら、手ぎわよくたどっている。ことに小品文の重視に、いかにもフランス的なエスプリの發露がうかがえる。清人の散文として、李漁・袁枚に特に紙幅を割いているのも、特色ある見解といえよう。小品文の先蹤を、『論語』先進篇の、師弟のほほえましい交流を描く「子路・曾皙・冉求・公西華侍す」の章に求めるなどは、一つの見識を示す考えとして注目される。このあたりの論述に当たっては、引用文がよく効果を發揮しているが（舊版にほとんど引用文がないのと對照的）、もう一つ感心するのは、話のつながりかたの巧みさである。たとえば、『顏氏家訓』の條において、顏之推の佛教信仰に觸れたあと、それと對照的に佛教に敵對的な態度をとった韓愈に話題を

移して、次第に彼の「古文」に論を絞ってゆくところ、また「古文」の節の末尾に蘇軾の「超然臺の記」を挙げつつ、次節で扱う「小品文」の伏線とするところなどは、いずれもその好例である。

第三章詩は、まず「古代詩の二つの源流」というタイトルで、常識通り『詩經』と『楚辭』を想定させながら、實際には『楚辭』の方を以後の詩史の展開の基點に据えている。『楚辭』を承けて「宮廷詩」(La poésie de cour)の節が設けられるのは、「七發」や辭賦あるいは楚調の詩（たとえば漢高祖の「大風歌」といった形式面の繼承を重んじての處置であるし、さらにそれが「豔詩」(La poésie érotique)へと連續するのは、『玉臺新詠』に集成されるような「宮體詩」が、辭賦などと宮廷という創作の場を共有するからである。だが、中間項の「宮廷詩」をひとまず外して、『楚辭』と「豔詩」のつながりを考えようとすると、その必然性がいま一つ説得力に缺ける恨みは残る。著者によれば、豔なる詩（たとえば「陌上桑」）にも地位が認められるようになったのが、後漢末に現われた新傾向を物語るもので

あり、そこから魏晉以降の「黄金期」の詩へと敘述を轉ずる契機が生ずる。

詩の章では、唐詩を頂點とする時期に大きな比重が置かれるのは當然として、詞や曲などのマイナーな領域にも注意は及んでいる。それぞれの時代の要請によって、新しい詩の形式が興起する點に、ことに著者の關心は向けられているようだ。そうした見かたは、裏返していえば、詩型が固定してしまうと、詩の質的な停滯が連動的に結果されるという考えに連なりうる。詩に關する著者の論評の下限が蘇軾・李清照、そして關漢卿の散曲にとどまってい、
「以後の五百年間については、かつての優れた先達に比肩しうる人物は一人として現われなかった」という敘述でこの章を締めくくっているのは、上記のような詩觀の反映ではないかと思われる。限られた紙幅の小冊子という制約は重々承知の上でだが、明清期の詩をその一言で默殺してしまうのは、いかにも武斷に過ぎる處置ではないか。ただし、それが同時に、公平で滿遍ない概説の持ちえない、一種爽快な齒切れのよさを生んでいることも事實である。詩とい

う形式上の特性にもよるが、この章ではことに多くの作品が引かれて、敘述に具體的なふくらみをもたらず配慮がなされている。

最後の第四章は、志怪・傳奇的文言小説、そして演劇と白話小説という俗文學を對象としている。「高級」な文學と「低俗」な文學の概念が、文言と白話の關係と分かちがたく結びついており、白話で書かれた文學作品が公けに價値を認められるのは、二十世紀の初めに西洋文學の影響を受けた結果であることなどの基本的な事實は、ここでも發端の部分で要領よく説明されている。著者レヴィ氏は、プレイアード叢書に收められる完譯『金瓶梅』を始めとして、小説研究の上で多くの注目すべき業績を著わしてきた、この道の專家である。その蘊蓄があればこそ、いくつもの大部な作品を含む俗文學の流れを、これだけコンパクトな形で紹介することができたといえるだろう。ただ、やはり紙幅の制約からか、長篇小説に關する記述はいささか窮屈な敘述に終わったことが惜しまれる。いま少しゆとりあるスペースで、著者に健筆を揮ってもらふ機會のあることを期

待したい。

全書を通じて、印象に残ることをなお一二挙げておきたい。その一は、フランス文學やヨーロッパ文學からのアナロジー、あるいは見立てについて。中國文學に親しみを持たせるための配慮として、著者は隨所にフランス文學の作家や作品を類比的にちりばめる方法を用いている。たとえば、司馬遷の「任少卿に報ずる書」を、最も深刻な問題を扱う、「傑出した作家による中國書簡文學の名作の一つ」として、その一節を引用したあと、「女性が稀な書簡文學の分野で、中國の侯爵夫人は全くいなかった」(第二章)とあれば、書簡文學で著名なセヴィニエ侯爵夫人(一六二六—一六九六)を、フランスの讀者はすぐ連想するだろう。また『紅樓夢』を論じた箇所では、次のような記述も見られる。「これは一種の『感情教育』(education sentimentale)なのか、それとも、五回もこの作品を読んだことを自慢していた毛澤東(一八九三—一九七六)が主張したように、『衰退期の封建社會の百科全書』なのか」(第四章)。毛澤東の『紅樓夢』觀と對置されるもう一つの見解は、フロベ

ールの『感情教育』をめぐる有力な解釋がそうであったように、(作者曹雪芹の)自傳的小説ということにほかなるまい。『紅樓夢』についてはまた、「滿州貴族の邸の女の園における、過去の榮華にすぎぬ失われた時を求めて」(une recherche du temps perdu)」というような形容もあり、この小説の性格の一面を、ブルーストの長篇小説の題名を用いて比喩的に示唆している。

その他にも、大衆的な人氣のあつた白居易がヴィクトル・ユゴーに比擬され、そして「ユゴーの後にはランボーが來た」とあるのは、「デカダン」の時代の幕を開けた李賀を指す(第三章)。また李漁の『閑情偶寄』には、「ヴォルテールの皮肉とモンテーニュの良識」(ヴォルテールはイロイ)が備わるし、その李漁から「中國のブリアーサヴァラン」の稱號を奪つたのは、『隨園食單』の著者袁枚である(第二章)。フランス文學以外のヨーロッパ文學による見立てとしては、『豆棚閑話』がボッカチオの『デカメロン』になぞらえられ、杜十娘が水中に寶の箱を投げすてるさまが、札束の包みを火に擲つドストエフスキー『白痴』のナスターシャに譬えられるよ

うな例(第四章)があつて、けっこう楽しめる。

その二は、著者の目配りの廣さについて。たとえば、小品文に關する節で、「小品文」なる名稱が現われる以前から、小品文的なエスプリは存在していた例證として、李商隱の作に擬せられる『雜纂』を挙げ、それが日本の『枕草子』にヒントを與えた可能性に言及するなど(第二章)は、その好例であろう。日本との關係でいえば、白居易の詩がわが國で人氣拔群であつたこと(第三章)はもとより、明末清初の儒教的な「ビューリタニスム」の色あいを持つ『好逑傳』が、瀧澤馬琴の未完の遺作『俠客傳』に影響を及ぼしたこと(第四章)にも觸れられている。ヨーロッパで早い時期に譯出された戯曲・小説等にも、かなりこまめに言及があつて、我々東方の讀者には啓發されることが多い。

最後に、明らかな事實の誤りについて述べておく。『文選』に先んずる選集の元祖として杜預の名が挙げられる(第二章)のは、摯虞の『文章流別集』を誤つたものである。また寒山詩を、禪の影響を受けた六世紀ごろの詩人グループの作とする(第三章)のは、どう見ても時期的に早す

ぎる。最近の通説に従つて、制作時期を二三世紀ほど引き下げるべきではないか。

思えば、カルタンマルク女史による舊版が出てから今日に至るまでの四十數年間に、フランス語に譯された中國古典文學の名作は、白話小説の領域を中心として大きく増えた。明清の主要な長篇小説は、『西遊記』を除いて、すべて翻譯がそろつたし、残る『西遊記』も、目下レヴィ氏自身によつて翻譯が進められつつあると聞き及ぶ。各分野の研究論文も、着實に層の厚味を加えつつある。それらのフランス・シノロジーの成果を、もういちど中國文學史の上に位置づけて、今後の展望を開く上でも、本書の出現は意味深いものがあるといえよう。

(京都大學 興膳 宏)